2020年4月12日（日）「喜びと恐れ」

マタイ 28:1-10

1 さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが
墓を見に来た。 2 すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石
をわきへころがして、その上にすわったからである。 3 その顔は、いなずまのように輝き、そ
の衣は雪のように白かった。 4 番兵たちは、御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死
人のようになった。
5 すると、御使いは女たちに言った。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけら
れたイエスを捜しているのを、私は知っています。 6 ここにはおられません。前から言ってお
られたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらんなさい。 7 で
すから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえ
られたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこで、お会いで
きるということです。では、これだけはお伝えしました。」
8 そこで、彼女たちは、恐ろしくはあったが大喜びで、急いで墓を離れ、弟子たちに知らせ
に走って行った。 9 すると、イエスが彼女たちに出会って、「おはよう」と言われた。彼女たち
は近寄って御足を抱いてイエスを拝んだ。 10 すると、イエスは言われた。「恐れてはいけま
せん。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会える
のです。」

【序論】

新型コロナウイルス感染症に伴う緊急事態宣言が発表され、今日は初めて動画配信での礼拝となります。このような形でも礼拝が守れるのは本当に感謝なことです。マタイ福音書からの説教は、３月８日以来（５週間ぶり）となります。３月末からお休みをいただきまして、暫し「雲隠れ」のような状態にありましたが、こうして再び講壇に立つことができました。足かけ三日墓の中におられた主イエスのイメージとは違うかもしれませんが、新たな力を受けて新年度を歩み出したいと思います。このイースター礼拝において、それも講解説教の流れの中で 28 章の主の復活の記事を学べることは、またとないタイミングです。私たちは主イエスの受難から埋葬までの記事を学んでくる中で、「その出来事の背後に隠された意味」を捉えることに集中してまいりました。主の十字架は、その苦しみのリアリティよりも、その出来事の意味が重要であった。そして、この復活の記事においても、その背後にある「意味」に注目すべきであります。

【本論】

本論１．御使いの顕現

さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。（28:1）

「**安息日が終わって、週の初めの日の明け方**」とは、安息日は土曜日の日没をもって終わりますから、日が変わった翌朝、つまり日曜日の早朝ということになります。主イエスは日曜日に復活し、その後、日曜日を選ぶようにして弟子たちの前に繰り返し現れる。現在に至るまで、キリスト教会で日曜日が主日とされてきた基礎がここにあります。

墓にやって来たのは「**マグダラのマリヤと、ほかのマリヤ**」だったと書かれていますが、このときのメンバーは福音書によってやや異なります。ヨハネはマグダラのマリヤだけだと言い（20:1）、マルコは「**マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメ**」と述べています（16:1）。このような数的な違いが生じたのは、当時流布していた伝承ごとに情報が異なっていたためでしょう。重要なことは、これらの女性が主イエスの十字架の死を見届け、そして埋葬まで立ち会ったと思われることです。主の側近の弟子たち（男たち）が誰もその場に居合わせなかったなか、これらの女性たちはまるで弟子の穴を埋めるかのように最後まで主に付き従ったのです。彼女たちが早朝にやって来たのは、マルコによると主の遺体に香油を塗るためだったようです。３月とはいえ、パレスチナの気候は瞬く間に死体を腐らせました。その主の遺体に対する最後の愛の表現として、彼女たちは番兵をも憚らずに墓へと足を運んだのです。

すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。その顔は、いなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。番兵たちは、御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。（28:2-4）

この御使いが降って来たのは、おそらく女性たちが到着する前で、番兵は逃げ、女性たちとは対面しなかったと思われます。主イエスが死から甦り、墓を出ようとされたタイミングであったのか、それとも主は霊的なからだに甦っていたので既に石を通り抜けて出てしまっておられたのか、定かではありません。一つ言えることは、御使いは女性たちのために現れたということです。御使いはこの女性たちにメッセージを伝えるために、神から遣わされたのでした。「御使い（ἄγγελος）」とは「メッセンジャー」「遣わされた者」という意味の言葉です。

本論２．御使いの伝達内容

すると、御使いは女たちに言った。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらんなさい。ですから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえられたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこで、お会いできるということです。では、これだけはお伝えしました。」（28:5-7）

御使いが女性たちに伝えた内容は、大きく二つに分けられます。

①主イエスが甦られたこと

②弟子たちとガリラヤで再会しようとしていること

まず、女性たちが「死者」を捜していたという点が指摘されています。彼女たちは主イエスの壮絶な死を見届け、アリマタヤのヨセフとニコデモが主の遺体を丁重に扱い、大きな墓に葬られるのを見たはずです。彼女たちの中ではそれが主イエスの最期であった。死とは生物全般にとって「終わり」を意味します。主イエスも 33 年という短い一生を遂げられた。その意味で、その他すべての人間と同列になられたのです。女性たちは死者を弔うために墓を訪れ、最後の別れのつもりで香油を塗ろうとしていたのでしょう。しかし、主はもはやそこにはおられなかった。「死せる者」は存在せず、死は打ち破られ、墓は開かれていたのです。「死者を捜す」という行為自体に本質的なズレが生じていた。御使いはこの新しい状況を女性たちに伝えなくてはなりませんでした。

更に御使いは、どこかに逃げ隠れている弟子たちに、主イエスが再会を求めていることを伝えるよう指示しています。弟子たちはなぜ主の墓にすら来ないのでしょうか。彼らの失意の程は私たちには理解しきれませんが、それはただ「師を失った」という程度のものではなかったでしょう。彼らは主イエスに自分の人生のすべてを賭けて従い、この方が世界を変え、歴史を動かし、イスラエルを現実的苦しみから解放してくださると信じていたのです。その方が殺された今、まるで敗戦後の兵士のような心の空洞を経験していたのではないでしょうか。それだけではなく、彼らは主を守ることができなかった自分たちを責めていたのではないか。とりわけペテロは、死んでも従い抜く決意を主に表明していたのですが、恐怖に取り憑かれ、主を否定し、最後は逃げ出してしまいました。この裏切り行為を本当は赦していただきたかった。しかし、死とは残酷なもので、謝罪の機会をその関係から奪い去ってしまうのです。

ところが、主の復活はこの「失われた関係」を取り戻し、元通りにする力を持つ。いや、復活こそ「罪の赦し」そのものとなり、弟子たちの過失を拭い去るのです。ガリラ

ヤでの再会は何を意味するか。それは、彼らが最初に主に召された地に戻り、再出発することを意味していました。二度とやり直せないと思っていた者にチャンスが訪れる。主との再会は彼らの心の闇を払拭し、人生そのものを新たに造り変えることになります。

本論３．喜びと恐れ

> **そこで、彼女たちは、恐ろしくはあったが大喜びで、急いで墓を離れ、弟子たちに知らせに走って行った。すると、イエスが彼女たちに出会って、「おはよう」と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拝んだ。すると、イエスは言われた。「恐れてはいけません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです。」**（28:8-10）

ここにはメッセージを受けた女性たちの不思議な反応が記されています。彼女たちの中で「恐れ」と「喜び」が同居している。これは状況が掴みきれず混乱した彼女たちの心理を表していると思われますが、私は一読者として共感を覚えました。人は救いのメッセージを聞いたとき、本当にそれが心で分かると、何か拍子抜けしたように一挙に体の力が抜けてしまうのです。それは、あれほど重くのしかかっていた罪の重荷が一瞬にして取り去られたときに生じる不思議な感覚です。自分は何もしていないのに、そこに赦しがあるのですから。自分が変わらなければ救われないと思っていた縄目が解け、このままの存在で神に受け入れられていることを知るのです。これが救いの本質です。

主イエスの復活は人の救いそのものを意味する出来事です。弟子たちに赦しを与え、関係の回復を一方的に宣言する。赦される側は何もできない。しなくてよい。その約束を信じるだけ。その「何もしなくてもよい」ということがまた罪人には混乱をもたらす。この「混乱」こそ「恐れ」「畏敬」と呼ばれるものだと思います。神の赦しの大きさ、憐れみの深さを知るところには、人の畏れが生じる。神の栄光を知るからです。

女性たちは何と、この赦しのメッセンジャーとして立てられてしまったのです。当時のユダヤ社会において、女性は「証人」として受け入れられていませんでした。つまり、言ったことを信じてもらえない可能性があったのです。男の弟子たちに告げたところで、それを彼らが信じるかどうか分からない。主の復活は希望に溢れたメッセージとして彼女たちの心に響きわたっていましたが、それを伝達することへの一抹の不安がないとも言えなかったでしょう。マルコ 16:8 にはこのように書かれています。

> **女たちは、墓を出て、そこから逃げ去った。すっかり震え上がって、気も転倒していたからである。そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。**

女性たちが誰にも何も言えずにいた時間が確かにあったのでしょう。彼女たちには励ま

しが必要でした。その励ましはどのようにもたらされたか。復活の主が直接会ってくださることによってです。主は彼女たちと出会われ、挨拶をし（「おはよう（Χαίρετε）」の原意は「喜びあれ」）、御使いが告げたと同じ内容をもって再度指示を与えました。復活の主との出会いは、彼女たちに確信を与えた。彼女たちは復活の主の最初の目撃証人（その意味で「女使徒」）となり、これを宣べ伝える者とされたのです。まさしく、罪の赦しの福音を携えて、罪の淵で喘ぐ友の許へと向かったのでした。

【結論】

このイースター礼拝において、マタイ 28:1-10 を通して、主は私たちに何を語っておられるのでしょう。それは、弟子たちにもたらされたと同様の「罪の赦し」のメッセージではないでしょうか。私たちも赦され得ざる罪人でありますが、主の復活は私たちの心の雲を取り払い、光の子としての真新しい人生へと導きます。主の墓は空であった。闇は光に打ち勝たなかったのです。

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。（ローマ 4:25）

【祈り】

復活により、罪の赦しそのものとなられたイエス様。このような状況下にありましても、イースター礼拝を守れたことを感謝いたします。画面越しでありながらも、主の復活を宣べ伝えられることは幸いです。女性たちが喜びと恐れとを抱いたように、私たちにも罪が赦された歓喜と畏敬の心を与えてください。世界中で主の復活が祝われています。試練の中にあっても、教会が力強くこの福音を宣べ伝えることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
名もなき女性たちを顧み、主の復活の最初の証人とならせ給うた、父なる神の愛、
罪の淵で苦しむ弟子たちに、赦しと和解を惜しみなく与え給いし、主イエス・キリストの恵み、
喜びと畏れに満たされ、次なる復活の証人とならせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。